

4. 主題設定の理由

①研究主題

自己をみつめ 関わりながら きらり輝く心をもつ子どもの育成

～道徳授業と道徳的実践の指導の充実を通して～

②主題設定の理由

本校では、平成22年度から3年間、高知県教育委員会の「道徳教育重点推進校事業」の指定を受け道徳教育を中心に研究実践に取り組んでおり、平成24年度（以下「今年度」とする）は指定3年目のまとめの年となる。

今年度の校内研究は、道徳教育に関わる昨年度までの研究実践をより進化・発展させるとともに、集約・整理していく必要がある。そこで、昨年度からの研究主題及び副題である「自己をみつめ 関わりながら きらり輝く心をもつ子どもの育成 ～道徳授業と道徳的実践の指導の充実を通して～」を今年度も引き続き主題として設定し、校内研究を進めていくこととした。

研究主題にある「自己をみつめる」とは、「自分自身を知る」ことであり、また「自分自身を考える」ことだと捉えている。すなわち、自分自身の内面をみつめることで、自分のよさや課題、これまでの経験や生き方、考え方を自覚し、自分がかげがえのない存在であるということに考えをめぐらせ、気づいていくと考える。

「関わる」とは、人（友達、先生、家族、地域の方々等）との関わりはもちろん、資料や指導内容との関わり、自分を取り巻くさまざまなものや自然環境、動植物、そして人間としての生き方との関わりであると捉えている。子どもたちはそれらと関わりながら生活しているが、それぞれの大切さや自分とどう関わっているのかについては意識して生活しているとはいえない。道徳の時間の中で、それぞれとの関わりについて考えたり、道徳の時間に考えたことを日常生活に生かしたりすることで、周りによりよく関わりながら、自分の心を成長させていこうとする子ども、学級集団になってほしいと考えている。

また、「きらり輝く心」とは、「自分を大切にすることや態度、人を大切にすることや態度、ものを大切にすることや態度、自然や生命を大切にすることや態度」と捉え、道徳の時間を要として、意図的・計画的に育てていきたいと考えている。そのためには、道徳的価値の理解〔道徳的価値は大切であること（価値理解）、道徳的価値は大切であるが実現は難しいこと（人間理解）、道徳的価値の実現に向けては多様な感じ方・考え方があること（他者理解）〕をすることが必要である。さらに、その道徳的価値を自分との関わりでとらえていくこと（自己理解）、人間としての生き方についての自覚を深めることが重要であると考えている。それらの理解は、道徳授業の中で「価値」や「他者」そして「自己」それぞれが関わりながら補充し、深化し、統合していかなければならないと捉えている。

このような道徳授業を通して培われた子どもたちの道徳的実践力が基盤となり、道徳的行為・行動や道徳的習慣といった道徳的実践ができるようになっていくのである。また、道徳的実践を繰り返すことによって道徳的実践力がさらに強化されることも考え、体験活動などの多様な経験の振り返りや、友だち、家族、地域の人々や自然との関わりをみつめることで、自分自身をみつめなおし、多様な価値観を共有していくことが、自己の道徳性をさらに高めていくことにつながると考えた。このような取り組みを通して、子どもたち一人一人が「きらり輝く心」を育てていくことにつながるのではないかと考えている。

昨年度までの校内研修では、道徳教育の推進体制づくり、心を耕す道徳授業づくり、より確かで内面から行動できる道徳的実践の指導のあり方、研究の普及を中心に取り組みを進めてきた。推進体制については、校長の方針のもと、月1回の研究企画委員会を軸に、授業改善・学力向上と児童理解・実践活動の両研究プロジェクトチームや、低・中・高学年ブロック、各学年別部会等のグループ等、それぞれの機能を活用しながら、全教職員の参画により、道徳授業の質的改善と道徳的実践の指導の充実に向けて実践的に研究を進めることができた。道徳授業については、道徳推進教師を中心とした理論的実践的研修や教具教材づくり、週一時間の道徳

授業づくりや研究授業、西部教育事務所の指導主事の訪問指導等を通して、指導者一人ひとりの授業力向上につながってきた。さらに、県道徳教育研究大会の実践提案、定期的な公開授業研究会の開催等により、研究成果の普及も少しずつ進めてきた。道徳的实践については、重点項目を「元気なあいさつ・安全な行動・学校を美しく」と設定し、児童理解・実践活動プロジェクトチームを中心に、児童会や各委員会の活動と連動させながら指導を進めてきた。

今年度は、これまでの研究実践を生かしつつ、下記によりそれぞれの取り組みの質をさらに高いレベルで実現していきたいと考えている。

まず、道徳教育指導体制を一層強化するために、道徳教育推進教師の計画的で創造的な指導性の発揮、研究企画委員会のメンバーを核とした各担当及び両プロジェクトチームによる焦点化された研究推進が必要である。これまでの指導及び研究実践上の課題を明確にし、その解決方策を具体的に検討し、全職員の能力・特性を生かして指導の充実を図っていくことで、実りのある研究としたい。

また、道徳授業をより一層充実させるために、昨年度研修を深めた「発達段階を踏まえた道徳授業」と「価値理解・他者理解・自己理解を促す道徳授業」を追求していきたい。そのために、ねらい、主題設定、研究主題との関連がしっかりと研究構想され、表現された学習指導案を作成すること、また、資料分析、発問、指導過程の研究を深めるとともに、児童の表現（言語）活動の充実を意識して授業を構成していくことなど、授業力・指導力をさらに高めるための研修を進めていきたいと考えている。

さらに、道徳的实践については、児童会・委員会活動や学級活動等特別活動とも連動し、より質実な姿を求め、指導を強化していきたいと考えている。特に道徳教育と学級活動の関連については、具体的な研修を進め、実践を積み重ねていく必要があると考えている。

一方、「学力」については、これまで教職員の共通理解のもと、教科における「基礎的な知識・技能の習得」を本校の目指す「確かな学力」とし、これを活用して、「自ら考え、判断し、表現する力」と「学習意欲」を加えたものを、本校において育てたい「豊かな学力」と捉え、その形成を目指して、授業づくりや学級経営を進めてきた。その中で、授業改善・学力向上プロジェクトチームからは、授業力の向上や学力の向上に向けた学校ぐるみの取り組み方策、児童理解・実践活動プロジェクトチームからは、子どもの良さをみつめ育てる視点、集団づくりの視点に立った教育活動、校内支援委員会からは、個別な支援を必要とする児童への対応のあり方を企画・提案しながら、それぞれのチームが独自性をもって具体的な取り組み方策を提示し、全教職員が一致協力して実践してきた。

これらの取り組みの成果として、昨年度の2～6年生の標準学力調査では、国語科、算数科の学校平均として、全観点において期待正答率を上回ることができた。国語科においては、昨年度よりさらに上昇し、目標とする期待正答率比110に近づくとともに、算数科については、すべての観点で目標を超える結果（114）が達成できた。しかし、国語・算数ともに活用の学力は（特に高学年において）十分な結果が得られず課題が残った。国語科の学力が向上しているのは嬉しい結果であるが、言語能力の弱さは本校の課題であり、なお一層研究と実践を深め、他教科他領域も含め思考力・判断力を伴った表現力の育成に努めていかなければならないと考えている。

このように道徳教育を本校の教育の中心に据え、「徳育・知育・体育」のバランスのとれた「豊かでかしこくたくましい」児童を育成することが本校の教育活動の目指すところである。これらの取り組みを通して、全教職員が一丸となって研究主題に迫り、本校児童の小学校段階における豊かな自己形成を果たしていきたい。